

めざめ

だい しゅう
第49集

町内学習懇談会 推進者向け資料

＜進め方の一例＞



本冊子は、めざめ第49集を使って、町内学習懇談会を進める際の一例として、各ワークシートごとに進め方の参考となるよう作成しています。進め方の一例として参考にしてください。

発行：草津市同和教育推進協議会

事務局 草津市立人権センター 啓発・教育係

〒525-0032 草津市大路2丁目1-35(キラリエ草津・3階)

TEL 077-563-1765 FAX 077-563-7070

ワークシート1「わたしの何を知りたいの」（2・3ページ）

（1）はじめに

○今日の懇談会のねらいの確認

今日は、参加者のみなさんと共に、「社会の中の人権のものさしが変化してきていること」を履歴書を参考にして考えていきます。

今日の懇談会は、「昔は当たり前だったことが、人権のものさしに当てはめると今はどうなのか」、「一人ひとりの人権を守る取り組みがアップデートされてきている」、「わたしの意識や感覚はそれに追いついているのか」をみなさんと一緒に話し合っていきます。どうぞよろしくお願いします。

（2）懇談

活動1 昔の社用紙から考える

それでは、プリント【資料1（1960年代の社用紙を参考に作成）】を配ります。時間をとりますので、この会社に入社したいという気持ちで記入してみましょう。

- ① これはちょっと書きにくい、書くのをためらう、質問の意図がわからないなどの項目はありませんでしたか。（一人ひとり出してもらいましょう）
- ② プリント【資料2（面接で必要な質問は？・不必要な質問は？）】を配ります。この中で企業が採用の面接の際に、あなた自身が必要な質問と必要ではない質問だと思うものに分け、その理由を話し合ってみましょう。

*一人ひとりが○をつけた理由などを発表できたらいいと思います。

活動2 今の履歴書から考える

次に、プリント【資料3（現在使用されている履歴書）】を配ります。また、時間をとりますので、それぞれの項目に記入してください。

- ① 先ほど書いた社用紙と比べてみましょう。なくなった項目は何でしょうか？
- ② その項目は、なぜなくなったのか？その理由を話し合いましょう。

活動 3 自分の体験を話し合う

さて、履歴書を例に考えてきましたが、これ以外にも、こうした例と同じように、昔は当たり前だったことが、人権感覚がアップデートされてきたことにより変わったと感じていること、実際に自分が経験したことを話し合いましょう。

- ① みなさんの中で、当たり前だったことが変わってきていると感じていること、経験したことを紹介してください。

*協力者や推進者が、「こう感じています」とか「こんなことがありました」など、最初に発言していただくといいと思います。

*言いたくないことは無理に言わなくてもいいということを事前に伝えておきましょう。

*一言ずつでも感想を言ってもらえたら、また、そこから話が広がればいいと思います。

活動 4 資料を読んで考える

プリントを配りますので見てください。ここに書かれているのは、今年の7月の第一講座で地域の青年が話されたことの一部を抜粋したものです。

*読んでいただいて、感じたことを話し合いましょう

*差別は許さない社会になってきて履歴書の項目や内容は変わってきました。しかし、社会のシステムが変わっても人々の人権意識が変わらなければ差別はなくなりません。だから、町内学習懇談会など、自分の人権感覚をアップデートする機会をとらえて学び続けていくことが大切だということを押さえておきたいです。

活動4 ふりかえり（感想の記入）

*時間があれば、2つ、3つ参加者から発表してもらえればと思います。

(3) まとめ

以前は、当たり前だったことが、今はそれが当たり前ではなくなったことがたくさんあります。今日みなさんと一緒に考えた履歴書もその一つです。履歴書については、企業が採用選考の際に履歴書に書かれた本籍や住所から同和地区を調べ上げ、本人の能力に関わらず、住所や出身で不採用にしてきた歴史があります。また、第1講座の講演にもあったように「〇〇って、怖いとこやしそこに住んでいる人は…」と面接で言われ不採用になった高校生がいます。これは昔の話ではなく、まさに今起きている差別です。こうした差別が起こっていることから、部落差別、同和問題は過去の話ではありません。また、自分とは関係ない話でもありません。

先に紹介した高校生のように部落差別によって夢や希望が奪われる社会を変えていくのはわたしたち大人の責任です。これからも皆さんとともに学び続けていきたいと思います。



【資料1】

身 上 調 書

ふりがな				生年月日	年 月 日		世帯主		
氏 名				年 齢	満 年 ヶ月		続 柄		
本籍							区 分	自家・借家・間借り	
現住所							電 話 番 号		
最 寄 駅 名	駅まで の距離	入社した場合 の連絡方法							
最 終 学 歴				部 科 名 本・別・定時			卒 業 中 退	年 月卒業(見込) 学年中退	
家 庭 状 況	氏 名	続 柄	年 齢	健康状況	職業(勤務先)・学校(学年)				同・別居
		父							
		母							
健 康 状 況	身 長	cm			視力(眼鏡)		右() 左()		
	体 重	kg			既往症	病 気			
	胸 囲	cm				色 神			
	痩型・肥満型の別	痩型・普通・肥満型			血 液 型		A・B・AB・O		
	現在の健康状態	健康・普通・病気()				飲酒・喫煙 1日 合 本			
性 格	長 所				趣味または娯楽				
	短 所				宗 教		自分は ・家は		
	得意な学科(仕事)				支 持 政 党				
	不得意な学科(仕事)				購 読 新 聞				
紹 介 者	氏 名				愛 読 書				
	住 所				尊敬する人物				
	職 業	自分との関係			特 技				

在 学 中 の こ と					
中 学 時 代	卒業時の成績は	上の上・下 中の上・下 下の上・下	高 校 時 代	卒業時の成績	上の上・下 中の上・下 下の上・下
	生徒会の経験は	年の時役名		生徒会の経験は	年の時役名
	クラブ活動は	1年次		クラブ活動は	1年次
		2年次			2年次
		3年次			3年次
	クラブ活動での役は	年の時役名		クラブ活動での役は	年の時役名
	健康状態は	良好・普通・病弱		健康状態は	良好・普通・病弱
	得意な学科			アルバイトの経験は有・無	有ればその内容
	不得意な学科				
	大きい病気・怪我				
大 学 時 代	専攻科目		健康状態は		
	ゼミナール		アルバイトの経験は有・無		
	クラブ活動は		長期休暇は何をしていましたか		
	自治会・クラブの役は		卒論の予定テーマは		
性 格 と 状 況	自分はどちらに	話好き・無口・根気強い・短期・陽気・おとなしい			
	属すると思いますか	明るい・暗い・神経質・積極的・消極的・派手・地味			
	スポーツをすること	好き・嫌い	好きなのは		
	スポーツを見ること	好き・嫌い	好きなのは		
	父の学歴と性格	(実父・養父)			
	母の学歴と性格	(実父・養父)			
	自分の性格について				
住 居 付 近 の 略 図					

(1960年代の社用紙を参考に作成)

【資料2】

*面接で必要な質問は？ 不必要な質問は？
必要だと思うものに○で囲みましょう

顔写真	学 歴	氏 名	アピールポイント	
身長・体重	支持する政党	職 歴	尊敬する人物	学校の成績
紹介者	資 格	家族構成	病 歴	障害の有無
趣味・特技	購読している新聞	志望する動機	本籍地	
性 別	愛読書	血液型	現住所	家族の職業
生年月日	自宅までの地図	配偶者の有無		

*必要だと考えた理由、必要ではないと考えた理由を書きましょう

-
-
-
-
-



履 歴 書

ふりがな	
氏名	
生年月日	昭和・平成 年 月 日生（満 歳）
ふりがな	
現住所	
ふりがな	
連絡先	

写真を貼る位置
(30×40mm)

【資料 3】

資格等	取得年月 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月	資格等の名称
校内外の諸活動		

志望の動機・アビールポイント等	*比べてみてなくなった項目を見つけてみよう *なくなった理由を考えてみよう
備考	

全国高等学校統一用紙（文部科学省、厚生労働省、全国高等学校長協会の協議により令和6年度改訂）

【資料4】

さて、みなさんにとって部落差別って身近でしょうか？

昨年こんなことがありました。わたしと同じ地域に住んでいる高校生が、自分の差別体験について話してくれたのです。

その高校生はアルバイトの面接で、「あなたは〇〇町のどの辺に住んでるの？」と聞かれた際に、自分の住んでる町名を詳しく答えました。すると面接官は「あ～、△△か…」と返したそうです。面接の結果、アルバイトは不採用でした。

その高校生は、面接官に「あ～、△△か」と返されたことが、ずっとモヤモヤして残っていたので、「なぜ自分が不採用だったのか」を確認するために、買い物ついでにそのお店に行きました。

その時、一緒にアルバイトの面接を受けた友だちが、そこで働いていたので、面接のときの話をすると、その高校生が不採用になったのは、「△△に住んでいるということがわかったかららしい」と、教えてくれたそうです。

モヤモヤした気持ちはさらに膨れ上がったので、事実を確認するため直接面接担当者と呼んでもらい、なぜ落ちたのかをはっきり聞いたところ、その面接をした担当者は、「△△って怖いとこやし、そこに住んでる人はちょっと…」と言われたそうです。その高校生はそこで即座に「それは差別やで。大の大人がそんなことしてもいいんか」とその担当者に言ったということがあったのです。

*感じたこと、考えたことを書きましょう



ワークシート2「ひとりでいきたい場所がある」（4・5ページ）

（1）はじめに

- ・今日の懇談会のねらいの確認

今日は、参加者のみなさんと共に「一人ひとりが安心・安全に生活できる地域にするために」を『めざめ』のワークシートを使って考えていきます。

今日の懇談会は、「身の回りの差別を見抜き、差別をなくすために必要なこと、自分にできること」をみなさんと一緒に話し合っていきます。どうぞよろしくお願いします。

（2）懇談

- ・活動Ⅰ 4コマ漫画から考える ①

それでは、プリント（資料1）を配ります。約30年前の4コマ漫画をみてください。

- ① 思ったこと、感じたことを一言ずつお願いします。
- ② 3コマ目で車いすを使用する主人公が気にしていることはどんなことでしょうか。思いつくものをあげてみましょう。
- ③ 4コマ目に「わがままなんかなあ」という言葉があります。もし、あなたがこの言葉を聞いたら、その人にどう返すでしょうか？少し考えて、話し合みましょう

- ・活動2 4コマ漫画から考える ②

もう一つの資料を配ります。2026年の4コマ漫画を見てください。

- ① 車いすを使用する主人公が一人で海に行けるようになった背景として、30年前に比べて変わったと思うことを考えて、話し合みましょう
- ② 資料を読んで思ったこと、感じたことを話し合みましょう
- ② 社会のバリアフリー化が進み、障がいのある人が一人で行きたいところに出かけるハードルは低くなってきました。しかし、今も乗り越えなければならないバリアがあります。どのような人たちに、どんなバリアがあるか。またその中で一番高いバリアは何か話し合ってみましょう

- * 話し合いの最初か、最後に資料3を配って話し合いの手掛かりにしてもよいと思います
- * 一番高い壁は、「わたしには関係ない」という無関心、「障がい者なのに…」という無理解、「わたしたちとは違う」という誤った認識、人々が持つ差別意識など

・活動3 わたしの周りを見つめてみましょう

- ① この4コマ漫画のように、人権が守られてきた社会になった例を、わたしたちの周りや自分の経験の中から出し合って交流しましょう。

・活動4 ふりかえり（感想の記入）

- *時間があれば、2つ、3つ参加者から発表してもらえればと思います。

⑦ まとめ

今日の懇談会では、参加者のみなさんと共に「一人ひとりが安心・安全に生活できる地域にするために」をテーマに「身の回りの差別を見抜き、差別をなくすために必要なこと、自分にできること」を考えてきました。

身近な題材として車いすを使用する方を例として考えてきましたが、一人で行きたいところに行けない人はたくさんいました。たとえば部落差別によって教育の機会を奪われ、駅名の文字が読めないために切符が買えなかったり、どの電車に乗ったらいいのかわからなかったりして乗れなかった人たちです。

わたしたちの社会は、そうした困りごとがある人たちへの支援を進めてきました。しかし一方で、差別意識を払しょくできていない人たちの、「特別扱いだ」「我慢したらいいのに」「人権、人権ってうるさく言うな」といった心ない声が当事者の人たちを苦しめています。これは例にあげた障がいを持つ人たちだけに向けられたものだけではなく、他の人権問題にも通じています。そして、同和地区やそこに住む人たちに向けられている差別意識も全く一緒です。同和問題の解決はすべての差別問題の解決につながります。無自覚、無関心、間違った意識、決めつけ、偏見、これらはすべて部落差別が今なお残る原因となる意識です。これを乗り越えた先に、わたしたちの未来があります。今一度同和問題を軸にあらゆる差別をなくす方法、システムを学んでいきましょう。

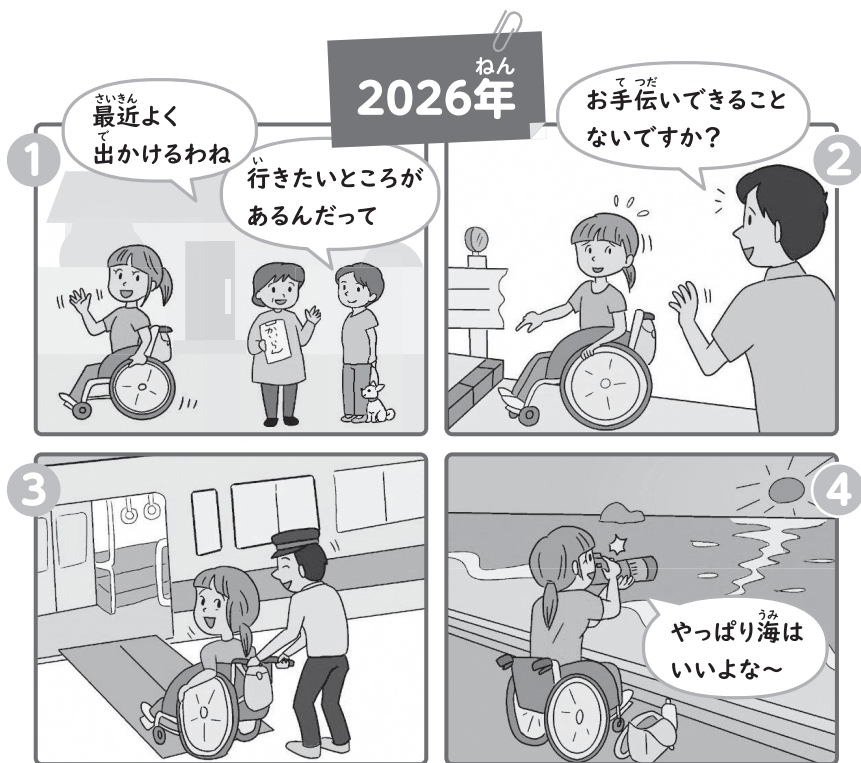
【資料1】

4 コママンガを見て気になったこと感じたことを書きましょう

3 コマ目で車いすを使用する主人公が気にしていることはどんなことでしょうか。思いつくものをあげてみましょう

4 コマ目に「わがままなんかなあ」という言葉があります。もし、あなたがこの言葉を聞いたら、その人にどう返すでしょうか？





前と比べて変わったところは

今もある高い壁は？

【資料3】

旅行が大好きな車いすユーザーです。最近、一人で出かけることも多くなりました。最近あった私の話を聞いてください。

電車に乗るために△△駅に行きました。

駅員さんにわたしが行きたい駅を伝えると、こう返事が返ってきました。

「この駅は、わたしたち駅員がお手伝いできますが、降りる駅は無人駅なのでもうちょっと先の駅員がいる駅で降りて下さい」

しかたがないので、わたしは、駅員さんの言う通りその先の駅で降りました。

後日、こうした事実と、「障がいがある、ないに関わらず、だれもが行きたいところに行ける社会になってほしい」とブログにあげたところ、いろんな意見が返ってきました。その中には、「障がい者が電車に乗れるだけありがたいと思え」とか、「わがまま言うな」、「家でおとなしくしていたらいいのに」という、批判のコメントがありました。もちろん、共感するコメントも多くありましたが、なんかもやもやした悲しい気持ちになりました。



ワークシート3「わたしには守りたい命がある」（6・7ページ）

（1）はじめに

今日の懇談会のねらいの確認

今日は、参加者のみなさんと共に「『命を守る行動』をキーワードに、災害という非日常の中で、わたしが直面する課題と解決のための行動」を考えていきます。

今日の懇談会のねらいは、「自分や大切な人の命を守る行動を考え、実践につなげる」ことをみなさんと一緒に話し合っていきます。どうぞよろしくをお願いします。

（2）懇談

・活動1 4コマ漫画から考える

それでは、プリント（資料1）を配ります。この4コマ漫画から考えてみましょう

- ① 会話の韓国語、何を言っているのか、絵を手掛かりに想像してみましょう
- ② 次のページ（11ページ）に正解があります。確認しましょう
- ③ 漫画の主人公のように、あなたが、言葉がわからない状況で直面する困りごとを話し合しましょう
- ④ 困りごとを解決するために取り組めること、必要なことを話し合しましょう

・活動2 SNSの情報から考える

次に、その調査結果（資料2）から考えましょう

- ① SNSの2つの情報から感じたことや考えたことを話し合しましょう。
- ② 自分の経験の中で似たようなことはなかったでしょうか？そのとき自分はどうしましたか？
- ③ こうした情報を受け取ったときに自分ができること、していきたいことを話し合しましょう

・活動3 差別と偏見を考える

次に作文を配ります。それぞれで読んでください

- ① 読んだ感想を話し合ってみましょう。
- ② 自分も似たような経験はありませんでしたか？ そのときどう感じていました

・活動4 ふりかえり（感想の記入）

＊時間があれば、2つ、3つ参加者から発表してもらえればと思います。

（3）まとめ

わたしの周りに飛び交う数多くの情報。その中で、うわさや思い込みによる間違った情報が正しいこととして広がり差別が生まれます。また、情報が正しくても、自分が持つ偏見や差別意識がじゃまをして真実を見る力が鈍り、差別し続けるという例があとを絶ちません。少し立ち止まって考えることができれば、おかしいと気づくことがたくさんあるはずです。

また、子どもたちは、家族など身近な人たちから入る情報は97%の割合で信じるという結果が出ています。これはほとんどの子どもが親の言う情報を信じるということです。そうしたときに親が、「あそこは怖いところだから遊びに言ったらだめ」と子どもに伝えたらどうでしょうか？何も知らない子どもたちは、『親が言うからよくわからないけどそうかな』と思うかもしれません。こうしてうわさがうわさを呼んで差別が広がっていくのです。

だから、町内学習懇談会などあらゆる機会を通して、正しく学び続けなければなりません。豊かな感性を磨き、人権感覚をアップデートしていくことが大切です。

本日はどうもありがとうございました。お氣をつけてお帰りください。

【資料 1】



한국여행で大きな地震に遭った〇〇さん。何とか避難所にたどり着きましたが、体調を崩してしまいました。
(日本語訳は11ページに)

ことば 言葉がわからない状況であなた自身が直面する困りごとや問題点を話し合しましょう

.....

.....

.....



もんだい 問題を解決するために取り組めること、必要なことを話し合しましょう

.....

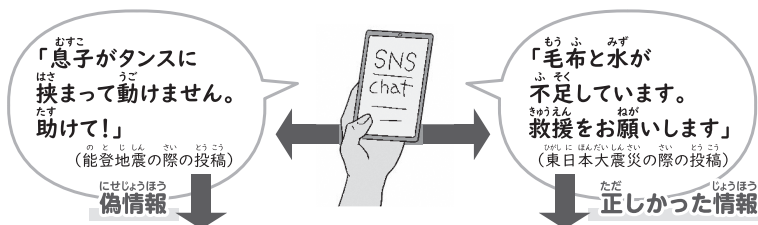
.....

.....

ちやうない ひなん ばしょ あなたの町内の避難場所は?

.....

【資料2】



救^{きうじゅうたい}助^か隊^{たい}が駆^{かけ}けつ^{ける}も投^{とうこう}稿^{こう}され^た住^{じゅうしょ}所^{しょ}
には何^{なに}もあ^りま^せん^でし^た。

高^{こうれいしゃ}齢^{れい}者^{しゃ}施^し設^{せつ}にヘリコプターで救^{きうえん}援^{えん}物^{ぶつ}資^し
が届^{とど}け^られ、多^{おほ}く^にの入^{にゅうきょ}居^{きょ}者^{しや}と職^{しよく}員^{いん}の命^{いのち}
が守^{まも}られ^まし^た。

誹^ひ謗^{ぼう}中^{ちゅう}傷^{きやう}等^{とう}に關^{かん}する情^{じょう}報^{ほう}の目^{もく}撃^{げき}経^{けい}験^{けん}

●見たこと^みがある……………50.9%

違^い法^{ほう}・有^{ゆう}害^{がい}情^{じょう}報^{ほう}に關^{かん}する投^{とう}稿^{こう}の目^{もく}撃^{げき}経^{けい}験^{けん}

●他人^{たにん}を傷^{きず}つ^{ける}投^{とう}稿^{こう}……………60.6%

●他人^{たにん}の氏^し名^{めい}や住^{じゅう}所^{しよ}等^{とう}プ^ぷライバ^ばシー
や個^こ人^{じん}情^{じょう}報^{ほう}に關^{かん}する投^{とう}稿^{こう}……………32.6%

●部^ぶ落^{らく}差^さ別^{べつ}に当^あたり^うる投^{とう}稿^{こう}……………25.8%

●ヘイトス^あピー^あチに当^あたり^うる投^{とう}稿^{こう}
……………36.5%

●プ^せライ^いベ^てトな性^{せい}的^{てき}画^が像^{ざう}・映^{えい}像^{ざう}等^{とう}を
載^のせ^た投^{とう}稿^{こう}……………36.6%

総^{そう}務^む省^{しやう}情^{じょう}報^{ほう}通^{つう}信^{しん}白^{はく}書^{しよ} 2025年^{ねん}版^{ぱん}

ふた じ れい かん
2つの事例^じから、感^{かん}じたこと^{こと}や
かんが はな あ
考^{かんが}えたこと^{こと}を話^わし合^あい^まし^まう

かんが さいがい ぶ らく さ べつ
考^{かんが}えてみ^みま^しう (災^{さい}害^{がい}と部^ぶ落^{らく}差^さ別^{べつ})

○避難^{ひなん}所^{じよ}での差^さ別^{べつ}: 「特^{とく}定^{てい}の地^ち区^くの人^{ひと}たちと一^{いっ}緒^{しよ}にな^りた^くない」とい^いった
露^ろ骨^{こつ}な発^{はつ}言^{げん}や、避^ひ難^{なん}所^{じよ}とい^いう閉^{へい}鎖^さ的^{てき}かつ不^ふ安^{あん}が強^{つよ}い共^{きやう}同^{どう}生^{せい}活^{かつ}の中^{なか}で、特^{とく}
定^{てい}の地^ち域^{いき}出^{しゅつ}身^{しん}者^{しや}に對^{たい}する心^{こころ}ない中^{ちゆう}傷^{きやう}、差^さ別^{べつ}的^{てき}な落^{らく}書^{しよ}き、ま^または支^し援^{えん}物^{ぶつ}資^し
の配^{はい}給^{きやう}にお^おける不^ふ当^{あつ}な扱^{あつか}い等^{とう}があ^あり^まし^た。ま^また、自^じ分^{ぶん}の住^すんで^いる
住^{じゅう}所^{しよ}が知^しら^れて^しま^う不^ふ安^{あん}が避^ひ難^{なん}をた^ため^らわ^せる要^{よう}因^{いん}とな^なった例^{れい}もあ^あり^まし^た。ま^また、被^ひ差^さ別^{べつ}部^ぶ落^{らく}の^ら人^{ひと}たち^に限^{かぎ}らず、外^{がい}国^{こく}人^{じん}、障^{しょう}が^い者^{しや}、女^{じょ}性^{せい}、
小^{ちい}さいこども^を持^もつ母^{はは}親^{おや}、性^{せい}的^{てき}マイ^{まい}ノリ^りティ^{てい}の人^{ひと}たち^に等^{たい}して配^{はい}慮^{りょ}
が欠^かけ^たり、心^{こころ}無^むい言^{ごん}葉^えで傷^{きず}つ^{ける}トラ^{とら}ブル^{ぶる}や命^{いのち}をも脅^{おそ}か^す人^{じん}権^{けん}侵^{しん}害^{がい}が
お^お起^おき^たり^して^いま^す。

「それでも僕は桃を買う」

宮城県 古川黎明中学校 3年

大沼 逸美（おおぬま いいみ）

夏休みのある日、僕は、家族といっしょに旅行することになり、一路、新潟を目ざして車に乗っていた。

朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食べたい。」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ。」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで。」と反論する。すると、母親は「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」と説きふせたのだ。しぶしぶ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は、心の中に何かひっかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな。」と言い、母も「確かに心配ではあるね。」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じようなことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されていると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっている、なんとなく不安だったからだ。サービスエリアの出来事にひっかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。

しかし、僕の頭から、「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなに、その言葉が気になるのか、僕は、旅行中、ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学五年生の時に友達から言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学五年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いはとまらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。

「黙れ。中国人。」

僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さっ

た。そして、自分は他のみんなと違うんだと切なくなった。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくてしかたがなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放った言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなって耳の奥に残っていた。

その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことを知りもしないのにばかにされ、福島の桃は、放射性物質のことをあまり知らないのに、危ないと決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはっきりと感じた。

だから、僕は、桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見をもち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思ったからだ。

新潟からの帰り道、僕は、磐越自動車道のサービスエリアで、桃を買った。それは、もう偏見をもたない、差別などしないという、小さいけれど大きな僕の決意でもあった。

二十一世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病気、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本にあるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分から遠ざけようとする。その気持ちが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私達は警戒心をもたず、この世界から、偏見や差別をなくすることができるのだろうか。その鍵は、二つあると僕は考える。一つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この二つが、未知のものへの警戒心を取り去ってくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすことは本当に難しいかもしれない。けれども、二つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力をもち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきっと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。

第33回全国中学生人権作文コンテスト入選作文

(法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催)